

落花吟三十首 次韻龍護叔 錄六

落花吟三十首 龍護叔に次韻す 六つを録す

す

其の五

【原文・書き下し文】

1	婪雨連朝綠草稠	らんうれんちよう りよくそうしげ 緑草稠し
2	此間無物慰閑愁	こ かん もの かんしゆう なくき 此の間 物の閑愁を慰むる無し
3	桃紅李白尋何處	もも くない すもも しろ 桃の紅 李の白きは何れの処にか尋ねん
4	金谷平泉餘古邱	きんこく へいせん こきゆう 金谷・平泉 古邱を余すのみ
5	薄命唯歸風一陣	はくめい た かぜいちじん 薄命 唯だ風一陣に帰するのみにして
6	繁華本付水東流	はんか もと みず ひがし なが 繁華 本 水の東に流るるに付す
7	山櫛聽取鶯聲老	さんろう うぐいす こえ 山櫛に鶯の声の老ゆるを聴取すれば
8	懶把囊錢掛杖頭	のうせん と じようとう か ものう 囊錢を把りて杖頭に掛くるに懶し

【平仄・詩型・押韻】 ○平声 ●仄声 ◎平声の押韻

1 ○●○○○●●◎
2 ●○○○●●○○◎
3 ○○●●○○○●
4 ○○●○○○●◎
5 ●○○○○○●●
6 ○○●●●○○◎
7 ○○○○●○○●
8 ●○○○●●●◎

七言律詩

『広韻』下平十八尤(稠・愁・邱・流・頭)。『平水韻』下平十一尤。

【校勘】

『清狂遺稿』以外に参照すべきもの無し。

【現代語訳】

其の五

雨は連日厭くことなく降り続け、緑の草が生い茂っている、ここには自然に湧いてくる愁いを

慰めてくれるものなどない。

赤い桃の花や白いすももの花はどこに尋ね行けばいいのやら、あの金谷園や平泉荘は長い時を経て丘になって残るだけ。

儂き命はわずか一陣の風に吹かれてしまい、賑わい栄えたものさえも東へと流れゆく川と一緒に流れていった。

山あいの窓から鶯の枯れた鳴き声を耳にすれば、酒代を入れた財布を杖に掛けて出掛けてゆくのもいいやになる。

【語釈】

1 婪雨 この詩語の用例は他に探し当てられない。「婪」は「憊」の別体字「字体は異なるが同音同義とみなされる」で、①むさぼるという意味でランと訓み、②寒いさま、悲しみ傷むさまでリンと訓むが、この「婪雨」は①に拠って、厭くことなくいつまでも降り続ける雨という意味に取っておく。連朝 本詩其四の第一句と同じく、「連日」と同じ意味だが、この句の四字目が平

声〔○〕に属する〈朝〉の字を用いなければならず、仄声〔●〕に属する〈日〉の字は使えない。明、貝瓊「城南絶句三首」詩の其三に〈已に春草の長じて門を閑すに従せ、風雨連朝 邨を出でず（已從春草長閑門、風雨連朝不出邨）〉。稠 密生するさま。唐、韋応物「靈巖寺に遊ぶ（遊

靈巖寺）」詩に〈地疏くして泉谷狭く、春深くして草木稠し（地疏泉谷狭、春深草木稠）〉。2 此間

「一」。「画題（畫題）」詩（『清狂遺稿』上 二二歳）に〈他年（後年） 吾も亦た塵跡（俗世界）より逃れ、長に間居を占むるに此の間（この絵に描かれているところ）に向かわん（他年吾亦逃塵跡、長占間居

向此間）〉。閑愁 なんとはなしに湧き起こる愁い。唐、張碧「花を惜しむ（惜花三首）三首」詩の其一に〈一審（心深くにある）の閑愁 駆り去らず（払いのけることができない）、殷勤として（心

を込めて）爾（そなた。散りゆく花を指す）に対して金杯に酌まん（一審閑愁、驅不去、殷勤對爾酌金杯）〉。

3・4 春の盛りの光景をもう目にするにはできない憾みを世の栄枯盛衰と重ねて詠む。

3 桃紅李白 赤い桃の花と白いスモモの花。梁、簡文帝「蕭侍中子頤（蕭子頤が人名。侍中は官職名）の春の別れに和す（蕭子頤が作った「春の別れ」の詩に唱和する）」四首（和蕭侍中子頤春別四首）詩に〈桃は紅にして李は白く朝妝（朝の化粧）の若し、顚顚（かたかた）を持して（花が萎びたまま）新芳

（晩春を過ぎて新しく咲く花）に比ぶるを羞（は）ず（桃紅李白若朝妝、羞持顚顚比新芳）〉、「梨花寮（恒遠醒窓の私塾、蔵春園の寄宿舎）に寓居し賦して醒窓恒遠先生に呈す（梨花寮寓居賦呈醒窓恒遠先生）」詩

（『清狂遺稿』上 二六歳）に〈桃李 門に満ち春色深く、英（英才）を育つる郷校（蔵春園） 青

衿（きん）足る（書生たちがたくさんいる）（桃李滿門春色深、育英郷校足青衿）〉。尋何處（いっただいど）をた

ずねたらいいのやら、どこにもありはしないという反語のことば。菅茶山（1748-1827）「芍薬

睡蝶の図(勺藥睡蝶圖)詩に(知らず 胡蝶の夢、更に何れの処の花を尋ぬるかを(不知胡蝶夢、

更尋何處花)」。 **4 金谷** 西晋の石崇(249-300)が築いた豪華壯麗な別荘、金谷園。本詩其三の

5「金谷」の語釈参照。 **平泉** 唐の李德裕の別荘、平泉荘。南宋、陳著「四月朔日(一日)、董

氏の依緑亭に郷飲す(地方の長官が優秀な人材や老人を敬つて宴会を催す)、口占(即興で口ずさんで詩を作る)(四月朔日、郷飲於董氏之依緑亭、口占)詩に(閑を得て(暇になれば) 楽しまずんば真に笑う

に堪う、金谷平泉 総て是れ空なり(得閑不樂眞堪笑、金谷平泉總是空)。 **餘** ……だけが残る。

古邱 長い時を経て変じて丘になってしまふ。唐、陳子昂「感遇三十八首」詩の其十四に(宝鼎

「権力を象徴する鼎」伊穀「伊水と穀水」に淪み、瑤台「華麗な楼台」古丘と成る(寶鼎淪伊穀、瑤臺

成古丘) **5・6** ここも前聯(第三句・第四句)を承けて満開の桃李の花も跡形も無く儂く散

り落ちてしまふ宿命を人生の儂さに重ねられる。 **5 薄命** 短い命、ここは桃李の花に加えて

儂き人生も指す。「秋草」詩(『清狂遺稿』上二六歳?)に(薄命終りに臨みて猶お露に泣き、芳魂

未だ断えずして又た秋を傷む(薄命臨終猶泣露、芳魂未断又傷秋)。 **歸** ……というところに落ち

着く、命を終えてしまふ。 **風一陣** ひとしきり風が吹く。唐、崔塗「花に感ず(感花)」詩に(東

風一陣 黄昏の雨、又た到る繁華の夢覚むる時(東風、一陣黄昏雨、又到繁華夢覺時)。 **6 繁華** 咲

き誇る桃李の花と世に時めいて栄えることをいう。「城に満つ」この詩の初句(城に満つ明月(滿城

明月)の二字を詩題とする)(滿城)詩(『清狂遺稿』上二七歳)に(一世の繁華 此の土に帰し、何人

か感慨して前朝を問わん(二世繁華歸此土、何人感慨問前朝)。 **付** 委ねる、任す。「七月既望(十

六旦)、秋晚香(秋元晚香を中国風に命名)余を招いて海浜の涼棚(涼み台)に飲み、酔いて後、

虎山先生(坂井虎山)を懷いて作る(七月既望、秋晚香招余飲于海濱涼棚、酔後懷虎山先生而作)」「(清狂

遺稿』下三四歳)に(君と一たび酔えば又た何をか求めん、人間(この世の中)万事 悠悠たるに

付せん(與君一醉又何求、人間萬事付悠悠)。 **東流** 黄河や長江など中国の川は西から流れて東シ

ナ海に注ぐ。川の水が止まることなく流れゆくという無常感が込められている。唐、李白「夢

到天姥に遊ぶの吟 留別(別れに際して立ち去る者が詩を詠んで残す)(夢游天姥吟留別)詩に(世間の

行樂も亦た此くの如く、古来 万事 東流の水(世間行樂亦如此、古來萬事東流水)。 **7・8** 春も

終わりを告げ、花を愛でながら酒を飲みに行くこともできないむなしさをもつて詩を結ぶ。

7 山櫛 山にある家の窓。この詩語の用例は未見。 **聴取** 聞こえる。 **釈大典** (1719-1801)

「万松院にて桜花を賞づ(萬松院賞櫻花)に(聴取す嚶嚶として(鳥同志が鳴きあう様) 友を求むる

鳥、遠人(遠くから桜を見にやってきた人) 未だ帰るを嘆くべけんや(帰るのが残念に思わないでいら

れない)(聴取、嚶嚶求友鳥、遠人未可嘆歸歟)。 **鶯聲老** 繁殖期のホーホケキヨというさえずりか

らチャツチャツという笹鳴きに変わったのであろう。これによつて春の終わりが知られる。南

宋、張抃「暮春絶句」詩に(満園緑暗くして(庭中が緑の葉で覆われる) 鶯の声老ゆ、正に是れ一

年の春の尽くる時（満園緑暗、鶯、聲、老、正是一年春盡時）。また「再び萩府（毛利藩の藩府のある萩）に赴き、夏木原を過ぎ、一絶（絶句一首）を得（再赴萩府、過夏木原、得一絶）」詩（『清狂遺稿』下 三九歳の〈深春 雨歇み 帰程を趁う（帰りの道を急ぐ）、処処残梅に老鶯を聞く（深春雨歇趁舩程、處處殘梅聽老鶯）〉の〈聽老鶯〉も鶯の鳴き声の変化を聞いているのである。 8 懶 ……するのが億劫でいやだ。唐、王維「偶然の作（偶然作）六首」詩の其六に〈老い來たりて詩を賦すに懶く、惟だ老いの相い随う有り（老來懶賦詩、惟有老相隨）〉。 把 手に取る。 囊錢 財布袋の中のお金。唐、白居易「秋の暮に西に帰る途中に情を書す（秋暮西歸途中書情）」に〈帰らんと憶うも復た帰るを愁う、帰るに一囊錢も無し（財布の中には一文もない）（憶歸復愁歸、歸無一囊錢）〉。 杖頭 杖の上の端。西晋の阮修は、百錢を杖に掛けて外出し、酒屋に行くとひとり心ゆくまで酒を樂しんだことから、〈杖頭錢〉は酒代の代名詞となった。

『清狂遺稿』上冊には、この詩の欄上に佐賀藩弘道館教授、武富圮南（1806-1875）の〈全首完好たり（非の打ち所が無い）（全首完好）〉という評語がある。